

政務活動費活動報告（視察）

(1) 出席者（会派名・個人名）

夢みらい 八木 嘉之
安藤 博

(2) 実施日：平成 29 年 10 月 24 日（火）～10 月 27 日（金）

【1. 調査の目的】

北方領土返還の取組運動のひとつとして、滋賀県では北方領土返還要求運動滋賀県民会議が結成されており、今回「第 35 回北方領土視察団」の一員として視察に参加をした。我が国固有の領土である北方四島は、第二次世界大戦終了直後、旧ソ連軍により不法に占拠され 72 年が経過した今もロシアの実効支配下にある。本年 9 月には、日露首脳間で会談が行われ、共同経済活動の具体的な進展に向け協議が進められているところであるが、四島返還は道半ばである。

今回の視察においては、現地の状況を自分自身の目でしっかりと確認し、さらに元島民の皆さんとの交流を通じて北方領土問題を正しく理解し、同僚議員並びに市民の皆さんへ伝えることにより返還要求運動の広がりを図っていくことを目的に参加した。

【2. 行程および概要】

(1) 10 月 24 日（火）

- 滋賀県庁において、奥村団長以下 30 名による出発式
- 中標津空港に降り立ち、奥村団長ほか団代表者による根室市長表敬訪問
- 根室市民との交流会に参加

(2) 10 月 25 日（水）

- 根室市の納沙布岬にある「北方館」を視察
- 北方四島交流センターに移動し、元島民で語り部「河田弘登志」様から聴講
- 根室海上保安部（巡視船乗船）を視察

(3) 10 月 26 日（木）

- 洋上から国後島を視察
- 北海道開拓の村を視察

(4) 10 月 27 日（金）

- 北海道庁訪問
北海道議会北方領土対策特別委員会 千葉英守委員長ほか関係者との意見交換会

【3. 内容および考察】

(1) 10月24日

奥村滋賀県議会議長を団長として、30名で団を結成し滋賀県庁での出発式の後、北海道根室市へ出発した。根室市では、私たち滋賀県民会議との交流会の場に、根室市石垣雅敏副市長、根室市議会遠藤輝宣副議長もご出席いただき交流の場を持った。交流会では、色丹島出身者や根室市北方領土返還要求推進協議会の副会長らのスピーチも聞かせていただいた。さらに、北方少年少女交流事業として本年度滋賀県に派遣された中学生も参加されており、様々な情報交換をおこなった。中学生が記された作文から「現在、北方領土にはロシアの方々も生活されている実態を考えたとき、四島の返還だけを考えるのではなく日本との共存共栄を考えることも必要ではないか」との内容が紹介され、時代の変遷を肌で感じると共に四島返還運動をいかに継承していくべきか、その難しさも同時に感じさせられる時間であった。

(2) 10月25日

根室市の納沙布岬より距離にしてわずか3.7kmしか離れていない歯舞群島の貝殻島を一望できる場所に建設されている北方館を訪問した。歴代首相や担当大臣などを始めとする閣僚の方々が訪問されている写真パネルを見て、その歴史の深さと重さを強く感じた。また、滋賀県内出身の国会議員も多く訪問されている様子が印象的であった。また、終戦時には17,000人余りの日本人が住まいされていた様子を展示資料などから伺い知ることができた。場所を北方四島交流センターに移し、佐田館長からの挨拶を受けた後、元島民で千島歯舞諸島居住者連盟の河田副理事長（語り部）からの講話を受けた。戦時中に島で暮らしていた様子や島から強制退去させられた時の生々しい状況などが語られ、自らの生活を有無も言わず奪われた当時の島民の思いは計り知れない苦悩があったと窺い知る。今後深刻な問題として「当時の時代を知るものが高齢者となり、少なくなり、やがていなくなることである」と聞かされる。語り部の育成にも力を注がれているようであるが、史実を正しく伝えていくことの大切さと、難しさの両面を思い知ることができた。

(3) 10月26日

洋上からの国後島を視察するため、尾岱沼港を出発し国後島までわずか10kmの地点まで行ったが、気象条件が悪く一望することはできなかった。洋上からの周辺の印象は、緊迫した様子もなくロシアによって領土を侵されているという雰囲気は全く感じられなかった。根室市を離れ、札幌市に移動し「北海道開拓の村」を訪問した。明治時代から昭和の初期に建築された北海道の街並みや産業構造の実態などを知るうえで大いに興味深い場所であった。とりわけ、近江商人の活動ぶりについても、商業に加え田畑の開墾や銀行の設立、織物工場の建設、炭鉱の開山など、近江商人が北海道においても高く評価されていたことの説明を受け、北海道との新たな関係を学ぶことができた。

(4) 10月27日

最終日は、北海道庁を訪問し、北海道議会北方領土対策特別委員会の千葉委員長から歓迎の

挨拶を受けた後、北海道における各種啓発活動やビザなし交流事業の推進、生活を奪われた元島民への援護活動の内容、さらには北方四島住民支援、共同経済活動などについて説明を受けた後、質疑などが行われた。意見交換を通じて、返還要求に向けて道民の皆さんは、国民世論の結集を求めておられ、いかにして意識の高揚を図っていくべきなのかを常に研究されている様子を具に知ることができた。また、意見交換の中では、県民会議の視察団から、こんなエピソードも紹介された。「過去に、視察団として訪問された県民会議のメンバーが滋賀に戻られた際に、県教育関係機関に対して、北方領土の現状を広く県民に浸透させる意味でも、特に若い世代の理解は大切であり、是非滋賀県内の高校の修学旅行先に、北海道を入れてもらうよう検討してほしい、との申し入れがされ、その意見が反映された」という内容であり、このことは、県民会議の視察が、とても有意義で有用な視察であることを強く印象付けるエピソードであると確信をした。

滋賀県民会議は、県内の多くの各種団体によって組織構成されているが、北方領土返還要求運動として視察に参加される団体には、まだまだ偏りがあるようにも感じる。議会からの参加だけに留まらず、世論形成を図り広める運動を引き続きおこなっていくためにも、県民会議の役割は重要であることを確信した視察であった。

以 上

